
パラレルは心配性がお好き

麻栗留音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレルは心配性がお好き

【Nコード】

N3588Y

【作者名】

麻栗留音

【あらすじ】

いつかどこかで在った事。あの気まずい空気は、此処とは少し違う世界が不意に顔を出した瞬間。そんな感じの、要は無駄文。

ジャングルジムのように組まれた鉄骨に緑色の蘿が絡み付き、その先に白い紙袋が無数にぶら下がる、そんな広大なぶどう畑だけが一面に広がる夕暮れの中で、僕はアパートまでの農道をひたすらに歩いている。僕の仕事は里山の整備で、毎日この誰一人として人の通らない、蛾とコウモリとぶどうを狙う野生動物しか立ち会わない農道を通勤している。今日はなんとなく気分で、昨日の夜に「明日は歩いて職場に行こ」と自分で決めたから、車で5分の道を30分かけてゆっくりのんびり歩いて来た。来る時はいつもと少し違う変化に新鮮な感じで、スローライフ最高などとルンルンしながら楽しく歩いて来たけれど、仕事が終わって今日に限ってずっと肉体労働＋何をするにもうまくいかない日だった、すっかり疲れちゃったコンディションでの徒歩での帰路は、ぐったりして事務所を出る時に正直なんで車で来なかったんだろうと自分で決めた勢いの思いつきをどうしようもなく後悔した。どうしたって歩いて帰らないとアパートに帰れないし、あつたかいお風呂で背伸びしながら唸る事も、ベッドにボタンキューして背伸びしながら唸る事も、昨日買って冷蔵庫に入れてあるBIGぶちんプリンも頬張って身悶えして唸る事もできないのだし、僕はただ早く帰りたい、それだけのシンプルな理由だけでこの目の前をげんなりするほど律儀に平坦に伸びるバカみたいに素直なただの道を、お風呂で、ベッドで、プリン食って唸りたい気持ちだけで産業ロボットみたいに無機質に歩いている。朝のルンルンなんてバカじゃないの。何がルンルンだ死ぬ。自分で自分を罵倒しながら、それでも僕は戦地より帰還の路につく兵隊のように休まず歩を進める。だって、だって、そうしないと帰れないんだ。今日は歩いて来ちゃったんだから。すっかり心の荒んだ僕が歩を進める度に、限界を超えた靴の穴の開いたソールに食い込まれたいくつかの小石がギチッ、ギチッ、と擦れた音を出し、それと合わ

せてキウムツ、キウムツ、という薄く残ったソールとアスファルトが擦れる音だけが一定のリズムで鳴っていた。それが段々と、なんかムカついてくる。自分…、なんでこんなところ、歩いてんだろう。なんで昨日、明日は歩いてみようとか思い立つちゃったんだろう。ポンキッキのあの歌でも聴いたならまだしも、ただの勢いって、何勢いでなんでこんな辛い目に自分で自分を遭わせてるんだろう。バカじゃん。ただのバカじゃん。歩を進める度に、メモリーに忠実すぎて融通の全くない車のナビゲーションみたいにバカの一つ覚えで繰り返す、ギチツ、キウムツの音が無性に感に触って、わざとソールを強くアスファルトに擦ってみたり、転がっている小石を気分はプロサッカー選手でシュートツ！してみる。そして少し楽しくなる。自分小学生じゃん、なんて楽しくなる。でもしばらくすると疲労が勝って完全に飽きて、また無機質に歩き始める。嗚呼…、早く帰りたい…。一瞬で帰りたい…。ドラえもん…、アレ出して…。定番の妄想が吹き出してくる。そして、ムカついていた足音がやがてジャリツ、ジャリツ、という未舗装に変わった路面を踏む音に変化した頃、西日も暮れかかり夕闇に包まれた牧歌的な農道の遙か先に、何も無い場所にただ佇む人の影が目に入って、僕は少しだけ驚いて目を開いた。少しだけ、しかし目標を凝視する気満々で開かれた僕の視線の遙か先、まるでここはそのまま賽の河原に続く道かと思わんばかりにまっすぐ伸びる、本当に何も無いただの道、その先に、ぼつりと人が立っている。僕の上には日が落ちて暗くなった夕闇の空、左と右には無数の白い紙袋がぼんやりと宙に浮いたように見えている、ただ恐ろしく広いどう畑。僕の下には何の変哲もない砂利の路面があるだけ。後ろにはひたすらに歩いてきた道だけがあり、それは僕の前にも繋がっている。でも、僕の前方には、後ろにある歩いてきた道が確かに伸びているが、佇む理由のすぐに解らない場所に、人だとすぐに解る物体が明らかに立っている。案山子や郵便ポストやその類の立地物は、この毎日通る道には無いんだ。一切無い。それは言い切れる、だって毎日飽きるほど通っている道

だから。全て解り切っている道だから、前方の人影は居てはいけな
いものなんだ。だってこの道は人つ子ひとり通らない。車だって稀
なんだ、僕ぐらいなんだ、通るのは。だってそれは僕は人里離れた
里山の整備が仕事で、通勤のために通ってるだけだ。そういう理由
で初めて通る理由のできる道なんだよ、此処は。僕の前方に見える
あれは、丸い頭に体が付いて、信じたくないけれど、確実に、人。
僕は表情を変えず、歩くスピードもテンポも変えなかったが、内心
の同様はやっぱ隠せなかった。2年間、毎日、全く人と行き合わ
なかったこの道で、なんで今日に限って、しかもこんな暗くなった
時間帯に、前から歩いて来るならまだしも、ご丁寧に明らかに怪し
く立ちすくむ人影が出現してしまった偶然は、僕には非常に高いレ
ベルの、立派な不安だった。あの人はなんであそこに立っているん
だろう。あそこに立って何をしているんだろう。立って何かを
する理由が全く無いあそこで、なんで立っているんだろう。誰。
近くに自転車が無いし歩いて来たんだろうけど、じゃあ、何をしに
来たんだろう。農具とか持ってる様子が無いけれど、じゃあなん
であそこにいるんだろう。ぶどう園の人じゃないのかな。立ち
小便をしている様子でも無いけれど、そして、農家のおじちゃん
やおばちゃんじゃなく若い女の人のようにだけどつ、じゃあ、なんで
こんな時間に若い女の人があそこにいるんだろう。この時間帯
に女の人がこの道のある所に立って、何をしなければいけないんだ
ろう。何かしなくちゃいけないのか、じゃあ、何を。何かした
いのかな、じゃあ、何を。誰かを待ってるのかな、うん、誰も呼
べないよ。携帯圏外だし、待っても誰も来ないよ、この道。あ、
車でも待ってるの、じゃあなんで車の来そうな方向じゃない方角に
顔が向いてるの。そっちは西の里山だよ。そんなところから車は
向かって来ないよ。なんでそういう不可解な事するの。しつこ
りと安心できる理由を僕に表して立っててくれよ、バツカじゃねー
の、怖えーんだっつーの。僕は相変わらず表情も歩くスピード
も一切変えなかったけれど、歩がどんどん進み、ソールに詰まった

小石と砂利道とソールが摩擦する音がただ回数を重ね、そこにいる理由が全然解らず、その存在が不安でしようがない前方の人影の様相が徐々に明らかになっていくにつれて、水溜まりのように小さい器の心は嵐の海の如く、静かにだが、制御不能になりそうなくらい乱れに乱れまくっていた。どうしたって逃れられない前方に、嫌でもゆっくり迫ってくる強烈な違和感を孕んだ景色への軽い絶望感。なんで自分は今、バカみたいに丸腰で歩いてなんかいるんだっ。何か武器が欲しいっ。車でもバイクでも自転車でも何でもいいから、とにかく徒歩より早く移動できる物が欲しいっ。もしもあの人影に追い掛け回される事になったら、その時に確実に逃げ切れるツール…、もしくはそうなる前に倒せる武器っ。いずれかが欲しいっ、でも、無いっ。無情だった。今、僕は安心と希望を託せる切り札が無い。もしも何か予期せぬ事態になったら100%、生身で乗り切らなくてはいけないんだ。僕は表に出さずに、悲しくなるくらいに隠れて怯えていた。徒歩とはなぜこんなにも逃げ道が無いのだろう、徒歩とはなんて無力な移動方法なんだろう。なんで今日に限って、歩いて職場に行くぞヒヤッホイなんて意気勇んで来てしまったのかを、脳裏にキヤタピラーのように無限に後悔させている。どうやら髪の毛の長い若い女と解ってしまったその違和感の根源の、更に顔立ちまで解ってしまう距離に自分が歩き、近付いている現実の、この逃げたくても逃げられない状況を回避したくてしょうがない。最高に近いバッドタイミングで突如として現れた違和感。その違和感は事件を予感させるノーサンキューな要素の髪の毛の長い若い女。髪の毛の長い若い女は殺人事件を起こす、僕の脳裏のキヤタピラーに、浅はかであり加えて間違っている推理小説の回想が加わって共に回る。回るキヤタピラーは段々と容積を増し、立体的に風船のように様相を変えてゆく。そしてそれは、そこに居る事がこの状況で明らかに異常という状況に入ってしまう、鼻筋の整った髪の毛の長い若い女の顔の異様にくつきり開かれた目が、ただのひとも面白い物など何も無い西の里山の方に向けられていて、もしかしたら何か視線を向けて立

ちすくむに値する面白い要素があるのではと、自らの目線で確認してもやはり変わった事など何も無い西の里山だった事で益々風船のように、急激に膨らんでゆく。なんであの人はあそこで立ってんのっ、なんでっ、どうしてっ、何してんのっ、誰っ、バカッ、ふざけんなっ、居んなよっ、嗚呼っ…、怖いよおっ！！僕はもう、爆裂の寸前まで膨らんだ不安と不信感の風船に押しつぶされ圧死しそうだ。嗚呼っ、もう10歩もしないうちに僕はあの人の横を通り過ぎなくてはならない。周りには頼り絶えるものなど何一つ無いんだ。ぼんやりと淡く白く光る無数の紙袋が浮かぶ、ぶどう畑。一番星が悲しく綺麗に光る夕闇のスカイ。ただ歩いて来た道、そして前に伸びる道。ウルトラに田舎の、パーフェクトな農道。そのどうしようもなく、どうもできない空間に泣き出しそうにただ歩く僕と、歩いて行こうヒヤッホイしてしまった今日に限って現れやがった、頼んでない非日常。嗚呼っ、あと5歩で僕は不安の種を通り過ぎる。この距離で、髪の毛の長い鼻筋の整った若い女が、最悪にも赤い服を着ている事が暗がり解ってしまった。口裂け女の可能性が浮上し、気が狂いそうになってきた。口裂け女だったらポマードって言わないとっ、ポマードッ、ポマードッ、ポマードッ。口裂け女じゃなかった場合に備えて小声で呟く。西の里山を見つめている、もしかしたら口裂け女かもしれないその女は、僕が遂に通り過ぎようとする直前に、黒い瞳が丸く際立つ、開かれた目線を事に僕に向けた。それに僕はうかつにもうつかり目をギョッとさせてしまった。少し体もビクンツとなった。ビクンツてなったのが気付かれたかもしれない。もうっ、嫌だっ、走りたいっ、この場から全力疾走して逃げたいっ。でも歩いてきた道は戻りたくないっ。だってアパートが遠くなる。アパートには疲れた体を癒す悦楽の時間が待っているんだ。これで逃げて引き返して結局この人がただの人で何も無かったら、また引き返した道に戻ってくるのは正直、メガトン級のうんざりだ。でも、もしかしたら引き返せば良かったって後悔する事態になるかもしれない。今僕が横を通り過ぎようとしているこの女は、この時間この

場所に居る理由が怪しさしか連想させない、しかも髪の毛の長い殺人時間を推理小説で良く起こす女なんだ。加えて赤い服を着ている口裂け女の可能性も秘めた女だ、このまま横を通り過ぎるのは良く考えたら物凄くリスクを孕んでるんじゃないか。心臓の鼓動が女に聞こえそうなくらい激しく高鳴り、すでに脂汗は額と背中をぐっしょりと濡らし、息は止まりそうなくらい小刻みになり、歩を進める脚はガクガクと震え、僕は酸素が脳に行っていないのか気が遠くなり、僕を見つめた違和感根源赤服長髪鼻筋、その集合体の姿のようで姿でなく僅かな光の反射光を網膜が映しているに過ぎないが質量を伴いそこに存在する、要するに女だ、女の横を通り過ぎるのが、怖い。怖い、それだけだ。真実はシンプルだ。嗚呼、もう僕は横を通り過ぎる。僕は結局、紆余曲折の思考の道を経て、この女の横を通り過ぎる。何も無いでいて。神様、どうか御守り下さい。お父さん、お母さん、ご先祖様…、何も…、何も…、何もありませんように…。

「あの、すみません。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3588y/>

パラレルは心配性が好き

2011年11月8日23時08分発行